

シネマまえばし — 文化の街、前橋に映画館が帰ってきた

小見純一さん(NPO 法人前橋芸術週間代表理事、フリッツ・アートセンター代表)に聞く
街の映画館

27歳で、地元のコミュニティーの喪失に愕然として、敷島公園にカフェレストランを始めたという小見純一さん(51歳)。アートや文化で街を変えていこうという活動を続けてきた小見さんが昨年12月、長らく文化の街前橋に不在だった、街の映画館を始めた。「1



丸山、小見さん、大島さん(スタッフ)

回1万人のイベントより、1日20人を365日という時期なのかなあと。アートはなかなかマイノリティーでしかなくて、高齢者や子どもたちのためにと考えると、映画が一番敷居が低く、間口が広い。補助金なしで自立してやっていくには一番手堅いし」。こう話す小見さん自身、大の映画好き。「今の前橋を作ってきた高齢の方々が、映画を観られないという現状があって、街の再生には、作った方々にヒントを頂くためにも、その方々に御礼をする意味で、まずその方々に映画を観て欲しかった」。シネマまえばしが、旧作を上映する名画座であるのもそういった理由からだ。「映画の観方を知っている方々にまず観てもらって。テレビCMをたくさん流すような映画しか観ない若い子たちに、それを引き継いでいくっていうことが大事だと思う。そういう場にしたいですね」。映画館といえばシネコンという昨今だが、「シネマテークたかさきが世界を見せる、と枠を広げたので、シネマまえばしはその縦軸で、歴史を見せる、記憶を見せるというほうに」と街の映画館の魅力を語る。

みんなで、街に行こう

小見さんの話から感じるのは、街の衰退や、高齢者や子どもたちの未来への強い危機感である。「商店街ってというのは後先(あとさき)なんです。何か目的があって、その前や後に、食事をしたり喫茶店に行ったり買い物をしたり。映画館がなくなると同時に街も衰退する。街を変えるには、映画館とか、とにかくそういった目的たるものを作らなきゃと。ショッピングモールに、映画館があり本屋があるっていうのはまさにそれ。行く行かないに関係なく、あるっていうことが大事で、行かなかったとしてもあって欲しい場所なんだよね。映画館すらないような状態が何年も続いたら街はスラム化していってしまう」。「シネマまえばしを街の再生の起爆剤に」、と言う小見さんだが「一軒だけでは難しい」とも。そんな小見さんがありがたい存在というのは、市内唯一のデパート、スズランだ。「みせ割(中心商店街で買い物を

した人への割引)っていうのをやってるんですけど、映画を観る前に買い物をしよう、というのはお店にとってもメリットがある。これがもっと商店街全体に広がってあげばうれしいなあと思う。支え合っていくという気持ちでやっていかないとね」。

昨年12月の開館以来、シネマまえばしの観客は、「高齢者中心からどんどん若い人も増え始めてくれている」。とはいえ、高齢の方々には、チラシ以外に映画館について知らせる手段がなかなか無く大変なようだ。そして小見さんが「5年10年先は映画館に積極的に行く子なんていなくなるかもしれない」と心配する子どもや若者。「便利になることと幸福になることは違う」と、「便利になったのに忙しい世の中」で、立ち止まることを提案する。「若い子が忙しくて映画を観なくなってる、そういう社会に対して、そうじゃないんだよ、そういう時間こそ大事なんだと言いたい」。

中心市街地に生まれた小見さんは、街は「住む場所以上に晴れの場、とっておきの場であるべきだ」と言う。「かつての、街に行こう、っていうわくわくする感覚をもう一回考えてみないと。今、自分達は子どもたちにわくわくする街を提案しているのかっていうことを。子ども図書館や公民館へ来る方々の顔を見ると、わくわくして来て下さっている。まだまだ人を呼ぶ力はあるから街全体にもそれが伝わっていくと面白いと思う」。危機感を持っていても小見さんの話は悲観的ではない。

この街でしかあり得ないことをする映画館に

シネマまえばしの大きな魅力は、小見さん自身によって「戦略的なものはなくかなり直感的に」選ばれた上映作品群。洋画あり、邦画あり。古いものではサイレント作品まで登場する。「選ぶのに何も考えていないくらいに思われるのが一番の賛辞」だそうだが、「名画座ブームの東京や、県外からのお客さんも多いですよ」と言われると、前橋の映画ファンも負けてはいられない。「さらに頑張って、ノウハウや力を蓄えて、もっと自分なりのプログラムをやっていきたい」と意欲的な小見さん。ぜひ街の自慢の映画館になって欲しいと期待も高まる。

「6月から営業日数を増やしたり、いろいろ変えていこうと思ってる。小津安二郎の連続上映などもやりますよ。本数を少なくして、時間を長くするとか。どこに着地するか、今は試行錯誤して実験的にやっている部分もあるけれど、前橋にとって必要な映画館はどういうものかってことを考えながらやっていきたいので。この街でしかあり得ないことがしたいからね。前橋で観なきゃダメっていうような映画館にしたいから」。これが、「魅力があれば、遠かろうが、駐車場が無かろうが、来る人は来る」という信念にもつながるのだろう。そして街の人々への思いをこう語る。「ふらっと来てもらって、何やってるのかな、と。そういう観方もあるんじゃないかなと思ってるので。いろんな出会いをね、偶然の出会いをして欲しいからね」。

さあ、あなたも今週末あたり、素敵な出会いを求めて、シネマまえばしへ、お出かけになりませんか？

(文責：丸山典子、加藤彰男)